伝統芸能

受け継ぎ守り抜く伝統

平戸には、各地区に代々受け継がれてきた伝統芸能が数多く存在しています。

現在は地域の若者も少なくなり、後継者もなかなか育たない状況ですが、伝統芸能を後世に残していくために、必死にこの素晴らしい伝統を守り抜いています。

今夏もお盆の時期にかけて、各地区で伝統芸能が披露されました。その一部をご紹介します。

獅子の須古踊り

（市指定無形民俗文化財）

8月13日　獅子地区

獅子の須古踊りは、江戸時代から干ばつ時の雨乞い行事として行われていました。各地の須古踊りに比べて、芸能や行列の組み合わせに特色があります。

8月13日に旧獅子小学校跡地で開催された「およりまつせ夏祭り」で、高い山、杖使い、笛・太鼓・鐘、枠ふりなどが披露され、多くの観客を魅了しました。

今回も人気を博した枠ふりは、木の枠を振りながら即興で祝い歌を歌うもので、他地区の須古踊りには見られない獅子独特の踊りです。

舘浦須古踊り

（市指定無形民俗文化財）

8月16日　舘浦地区

舘浦の須古踊りでは、小学生から大人までが大名行列に扮した華やかな行列が、舘浦地区の中通りなどを練り歩きました。行列は、民家の前や比賣神社、生月大魚籃観音、法善寺などで槍、挟箱、杖の演技を披露しました。

神社や寺などでは、槍、挟箱、杖の奉納の後に「アビャゴ」役の子どもが下を向きながら祝詞を唱え、中踊りと傘鉾が披露されました。

また、子どもを傘鉾にくぐらせ無病息災を願う姿も見られました。

度島盆ごうれい

（県指定無形民俗文化財）

8月15日　度島地区

度島の盆ごうれいは、島民の平和と豊年、豊漁を祈願して江戸時代、松浦家29代鎮信（天祥）の頃に始まったと言われています。

大名に扮した行列の一行は、本村地区内の道を練り歩き、度島診療所・度島ふれ愛センター前、本村桟橋、立願寺などで、幟、花杖、須古踊り、奴踊り、棒術などを奉納しました。

中でも高さ約15mもある織を一人で持ち上げる勇ましい姿には、見物人の皆さんから大きな声援が送られていました。

平戸のジャンガラ

（国指定重要無形民俗文化財）

8月18日　平戸地区

平戸のジャンガラは特有の念仏踊りで、自安和楽とも書きます。起源は定かではありませんが、志々伎神社の神田領民が豊年祈願の踊りとして奉納したことが始まりとされています。

ジャンガラは、平戸を代表するお盆の伝統芸能で、笛や太鼓、鐘の音が響き渡る中、華やかに飾った花笠を頭にかぶった踊り手とはやし手が、腰に小太鼓を結びつけて、「ホーナーゴー、ホミデーデ」と歌います。これは、「穂長う、穂実出」ということで、豊作を願う言葉といわれています。